# 岐阜新聞のサンデーコラムに掲載されました

岐　阜　新　聞　　2013年（平成25年）6月9日 日曜日

## サンデーコラム

古井憲司・クリニックママ院長

# 不妊治療からお産まで

## 立場による患者意識の変化

私は産婦人科医である。専門は不妊症治療である。特に、体外受精・顕微授精などの高度生殖補助医療が専門分野である。

不妊治療に携わるようになって既に25年以上になるが、不妊治療とは、結婚後なかなか子供に恵まれない夫婦を治療して、妊娠反応が陽性に出れば良いというものではない。もちろん、妊娠初期の超音波検査で胎嚢と呼ばれる赤ちゃんの袋が見えれば成功というわけでもない。その後に流産してしまったら成功とは言えないのである。

不妊治療とは、患者が妊娠成立して無事に出産、我が子を家に連れて帰ることができて初めて、完了したと言えるのである。つまり、不妊治療の先に妊娠中の管理、妊婦健診があり、さらにその先に分娩という大仕事が待っているのである。不妊治療→妊婦健診→分娩という流れは一連のものであり、そのような考えのもと、私は現在のクリニックを立ち上げた。

クリニックでは、一般不妊治療はもとより、体外受精・顕微授精などの高度生殖補助医療を毎日多くの患者に施し、毎月30人～50人の方を妊娠に導いている。もちろんその中には流産で終わる人、遠方から不妊治療のみを当院で希望され、分娩は地元の産婦人科クリニックに戻られる方など様々であるが、不妊治療を施して妊娠が成立して、当院で出産される方は毎月20人～30人ぐらいである。

我々は、このように不妊治療から妊娠・出産までを一連のものとして対応しているが、実は、不妊治療と分娩とは、全く異質のものである。まず、患者の不妊治療と分娩に対する認識は、真逆である。医療の現場にいてまず思うことは、不妊治療を希望して当クリニックを受診される方は、概にもすがる気持ちで来院される。特に高齢であればあるほど、難治性の不妊であればあるほど、そうである。よって、例えば結婚後10年間子供に恵まれなかった夫婦に妊娠してもらえた時などは、皆、涙を流して喜ばれ、大変感謝される。つまり、不妊治療とは先の見えない、保障の無い医療であるため、妊娠という結果が出た時は皆、心より感謝するのである。

一方、出産に目を向けると、分娩予定日があらかじめ決まっていて、その頃に元気な赤ちゃんがこの世に出てきてくれるという、患者にとっては赤ちゃんを無事に出産できることが当然の権利と思っているふしがある。しかし我々産婦人科医から言えば、これは大きな間違った認識であり、赤ちゃんが無事にこの世に生まれてくることができたら、これは当たり前の結果ではなく、自分の運命にもっともっと感謝すべきであろう。妊娠、分娩とは、無事に生まれてくるまで本当に何が起こるか分からないのである。どうして産婦人科医のなり手が少ないのだろうか？　産婦人科医の責任の重さに加え、今述べた、生まれて当然との患者の意識がその要因となっていることは間違いない。

だから我々は、産婦人科医は常勤3人、非常勤8人、新生児専門医1人の多くの医師から成るチームで妊娠・分娩に対応しているのである。

私は現在、このようにたくさんの優秀な産婦人科医、小児科医に囲まれて医療を行えることを本当に幸せと思っている。そして、この現状に大変感謝している。しかし、出産とは、生まれてくるまで何が起こるかわからない未知数の部分があるということを、是非、このコラムを読んでいる方々に分かっていただけたらと思う。お産は無事に生まれて当たり前という間違った意識がもう少し薄らいだら、産婦人科医を目指す医学生が増えるであろう。

ふるい・けんじ　1960年生まれ。日本産科婦人科学会専門医、日本生殖医学会生殖医療専門医、日本生殖工学会理事、日本生殖心理カウンセリング学会理事、日本IVF学会評議員、日本生殖医学会中部支部評議員、岐阜県産婦人科医会理事、岐阜県特定不妊治療費助成事業指定医療機関審査委員ほか、多数の役職を務める。